

＜FM千里 ラジオ「映画の森」に電話でゲスト出演＞

平成22年10月23日（土） 17:00～18:00

林：どうして弁護士さんが、弁護士以外の活動、ちょっと教えてください。

坂和：え？弁護士以外の活動ですか？

林：はい、そちらの方で随分お目にかかることが多いのですが。

坂和：そうですね。真っ昼間に試写室の中で林さんと会うことも多いですけども、弁護士活動は若い人達に変わってやって貰うことができるけれども、映画評論家活動は私しかできないと。そのために自分が観なければならぬ、自分が書かなければならぬという必然性が強いわけですね。だから、優先順位の問題ですね。こんなことあまりうちの依頼者に聞いてもらおうと怒られてしまうので、ちょっとそれは内緒にしてもらって。

林：毎日というか、一カ月だったらどれくらい、年間には何本くらいご覧になるのですか？

坂和：多い時は、一番多かった時は年間330本だったんですよね。今ちょっと減ってますけど、だいたい年間200本くらいに減らそうと思ってます。本業に影響が出ると困るので。

林：出てないんですか？そんなにご覧になってて。

坂和：ここ7、8年はそのせめぎ合いをやってますね。

林：本もたくさん書いてらっしゃって。

坂和：そうですね。

林：また、早いですよね。

坂和：早くなければ出来ませんよね。

林：あの、ご覧になった映画、すぐ帰られてお書きになるのですか？

坂和：そうです。

林：また、歴史的な背景などそういうものも、どうしてあんなに早く書けるのかっていうのが、とても不思議なんですけども。

坂和：まあそれは、弁護士36年やってますけどね、その極意は全く同じで、早く論点を整理して、早くその資料を集めて、早くそれをまとめていくと。極意はその一点ですね。

林：何にでも、それは極意になる？

坂和：そうです。すべて共通ですね。

林：そうですか。今日はですね、たつぷりと私も観ていないそういった作品もご紹介いただこうと思っています。

坂和：はい、わかりました。

林：まずは、何からご紹介いただけますか？

坂和：そうですね、先程『ラスト・ソルジャー』の話出てましたよね。『ラスト・ソルジャー』は、是非私も観てもらいたいと思う作品なので、これからいきましょうか。

林：はい。じゃあお願いします。ジャッキー・チェンが張り切っておりましたけれど。

坂和：そうですね。あの、ジャッキー・チェンの映画ってね、アクションとユーモアとそこの両立がジャッキー・チェンの映画の特徴だと思うんですけどね、最近の『ベスト・キッド』は人情的な物語だったけども、『新宿インシデント』とかね、『ラッシュ・アワー』とか、そこらへんもうひとつ飽きてきたなって感じがあったんですよ。そういう視線で見ると、今度の『ラスト・ソルジャー』は非常に面白いと思いますね。

林 : 本当に同感です。でも、これ時代背景っていうのが、何も思わなくてもただ面白いと思ったんですか。

坂和 : それでは駄目ですね。それでは全然駄目ですね。まず映画の最初にね、時代背景の説明があるんですけども、サラッとやってますから、やっぱり中国史の、特に秦の時代とかね、三国志の映画とか小説とかね、そういうところに興味を持って知っている人は、「なるほど。あの時代か」と、ぱっとわかると思うんですけどね。それがわからなければ、なかなかわからないと。答えを言いますと、紀元前の、紀元前ですよ、紀元前ってまずわかりますよね？キリストが生まれる前ということですから。キリストが生まれる紀元前221年というのが、秦の始皇帝が中国を統一した年で、これが1つのキーポイントなんです。先程のあの視聴者の方のハガキでもね、最後にはちょっとビックリしたということでしたけども、秦の始皇帝というのは、あんまりイメージは良くないですけども、実はすごいやっぱり皇帝さんで、中国をはじめて統一したというすごい事業を成し遂げたわけですけどね。でも、その裏腹に周りの6つの国を全部征服したと。こういう極悪非道なことをやってるわけですよ。

林 : 秦の始皇帝を扱った映画というのは、ありますよね。

坂和 : いっぱいありますよね。『始皇帝暗殺』とかね、それから最近の『HERO』とかもね。

林 : 良い役柄というか、良い位置ではないですよ。

坂和 : そうですね、だいたいそうですね。日本でも昔、勝新太郎の『始皇帝』とかあるんですけどね。

林 : え？勝新太郎？

坂和 : そうです。林さんご存知ないですか？

林 : ちょっと年代的に・・・一緒にしないでくれます。

坂和 : そうですか、申し訳ないです。

林 : そうなのがあったんですか？

坂和 : 秦の始皇帝は、やっぱり権力の権化みたいなもんで残忍な奴だというイメージなんですけどもね。しかし、実際天下を統一して、やっぱりすごい制度を作って、貨幣制度作ってとかね、すごいことやってるわけだから、それはそれで評価しなきゃならんと。この話あまりいくと、また脱線します。その秦の始皇帝が戦国七雄と言われている一国だったわけですね、秦というのはね。その中で一番西にあった秦国が力を強くして行って、周りの6国をみんな滅ぼしたと、そういう時代なんです。ジャッキー・チェンとワン・リーホンが主演として登場するこの時代は、まさにその直前ですね。秦の始皇帝が全国を統一する直前ということなんです。そして、最初ナレーションで、梁国の兵士ジャッキー・チェンと衛国の将軍ワン・リーホンと紹介されるんですけども、これは実は真っ赤な嘘なんですよ。

林 : え？梁の下っ端兵士がジャッキー・チェンで・・・真っ赤なというのは？

坂和 : だから、梁の国なんて存在しないんですよ。

林 : え？棟梁の梁と書いた梁という国はなかったんですか？

坂和 : 無いです、無いです。それから、衛の国の将軍がワン・リーホンですよ。衛の国の衛は自衛の衛という字ですけども、その衛の国も存在しなくて、要するに架空の国なんです。それから、1番最初に両軍が激突して、3000人の将兵全員が死んだと、それが鳳凰山の戦いであると、まことしやかに言ってますけど、これも真っ赤な嘘で、衛国と梁国との間の鳳凰山の戦いなんていうのは、どこにも存在しない架空の話なんです。

林 : そうなんです。そういうのじゃあわかって観ていたら、どうですか？最初から。

坂和 : いやもちろん、映画というのは作り事の話だということは大前提ですから、それがけしからんというのはナンセンスですからね。だから、その3000名が亡くなった後で、ジャッキー・チェンが胸に

矢が突き刺さっているにもかかわらず起き上がってくると。あのシーンはめちゃくちゃ面白いですね。

林：あれは倒れましたね。本当に観ながらなんか笑っていいのか、なんなんだこれっていう。

坂和：そうですね。だから、あそこでぱっとこの映画引きつけられますね。

林：そして、じゃあ先生の『ラスト・ソルジャー』で1番面白かったところはどこですか？

坂和：これはね、見所としてはね、やっぱりその一種のロードムービー、しょうもない兵隊が腕の立つ将軍様を自分のところの国に連れて帰ったら金がもらえると、そういう根性で将軍を連れていこうとするわけですね。将軍様はやっぱり頭も良いし腕も立つ、まあ、ところが如何せん大怪我をしているので、なかなかそれに対抗できないと。そういう弱みにつけ込んで将軍を連れて行こうという兵士の根性がね、本来いやらしいなというものがあるんですけどね、しかし、好対照の2人が織りなすロードムービーという、そういう設定が非常に面白いですね。

林：ただ単にジャッキー・チェンの下っ端の兵士が梁の国まで将軍を連れて帰るとというのが、簡単なようで簡単じゃない。山越え谷越えで。これは本当に見応えのある映画でした。

坂和：そうですね。それで、そのエンタメ性がうまく作っているのが、その将軍の弟が搜索隊と称して現れてチャンチャンバラバラが展開されると。もう1つは山賊団。このわけわからん言葉をしゃべる山賊団が出てきて、非常に奇妙なケンカですけども、そういうなんでもありのハチャメチャな争いが展開されると。そこらへん、やっぱりジャッキー・チェン映画特有の面白さですよ。

林：リスナーの方のメッセージにもありましたけども、やっぱり最後のNGでちょっと救われるようなところがあったと。

坂和：まあそうですね。

林：エンディングのええ？ってところが救われて。ありがとうございます。『ラスト・ソルジャー』、そして続いては？

坂和：はい。続いてはね、やっぱりちょっと大作ですけども、久しぶりの『ロビン・フッド』ですね。

林：これまだ観てないんですよ。

坂和：ああ、そうですか。

林：あの、いわゆるロビン・フッド物語でしょ？

坂和：いわゆるロビン・フッド物語と思ったら大まちがいで、あのケビン・コスナーがやった20年ほど前のロビン・フッドっていうのはね、これは本当に正統派ロビン・フッドですけどね、今度のラッセル・クロウがやるロビン・フッドはぜんぜんそれと違う『グラディエーター』ばりのロビン・フッドということになるわけですね。それってなんでなの？ってことになるわけですけどね。まあ私は弁護士として、当然憲法というのが一番大事な法律として勉強しているわけですけどね、まずこのラッセル・クロウのロビン・フッドを観てもらうについては、イギリスのマグナカルタというものをちょっと事前にでも勉強してもらいたいなと思うんですけどね。

林：イギリスの何を勉強すれば？

坂和：マグナカルタ。1215年にイギリスで成立した憲法みたいなものですね。大憲章と呼んでいるんですけども、多分中学校・高校の時の歴史で出ているんじゃないかと思うんですが。

林：大憲章と言われたらそんなものがって・・・

坂和：そうですね。だからあの一番大きな流れでいけば、1789年にフランス革命が起こったと。フランス革命というのは、自由・平等・博愛を旗印にして市民が革命を起こして王様をやっつけたと。それが1789年ですね。ところが、1215年にイギリスでは大憲章という、今の憲法のようなものが出来たと。それってなんなの？っていうと、王様の権利を制限するんやと、そういうものを貴族連合、

豪族連合のようなものが作ったわけですね。だから、そういう歴史的な大事件で、その時の権利の章典がその後アメリカの独立戦争とかそういうところにも全部脈々と繋がっていったわけなんですよ。だから、法学部志望の学生必見と、弁護士の私としては言っておきたいんですけども。

林：ロビン・フッドですか？

坂和：そうです。

林：すごいですね。ラッセル・クロウもそんなに知的な雰囲気はなかったのですが。

坂和：そうですね。

林：じゃあ、ロビン・フッドはいわゆる私達の持っている、頭の上りにんごを置いたのを射るとかってそんな・・・

坂和：頭の上りにんごのやつは、ロビン・フッドではなくて、あれはウィリアム・テル。

林：あ、そうでしたね。私も今言いながらちょっと違ったのかなって。

坂和：だから、ロビン・フッドと言えば、まあもちろん弓の名手、それから緑のタイツ、それからシャードの森。それと、日本では石川五右衛門が義賊として有名ですけどね。だから、ロビン・フッドもいわゆるイギリスにおける義賊、国王に抵抗した庶民の味方をした義賊、森の中に立てこもって自分達のコミュニティを作ったと。そういうのが、一般的なロビン・フッド像なんですよ。だから、今までのロビン・フッドという映画はみんなそういうロビン・フッドを描いていたんですよ。ところが、今回のラッセル・クロウのロビン・フッド、リドリー・スコット監督が描いたロビン・フッドはそうではなくて、そういうロビン・フッドが誕生する前の誕生秘話みたいなんですよ。

林：今まで誰も扱ったことのないような？

坂和：そうです。だから、ロビン・フッドとはアウトローであるというのが出るんですけど、なぜ彼がアウトローになったのかというものをリドリー・スコット流に描いてみると。こういうことなんですよ。そうすると、ロビン・フッドが「うわあ、すごいことやってるな」とかね「格好良く庶民に施してやってるな」とかね、そういう軽い視点ではなくて、やっぱり歴史的な背景とかそういうものを勉強しなきゃあかんということになるんですね。

林：歴史的なそういう背景を知っていれば、より一層楽しめる・・・

坂和：そうです。

林：そういう風なロビン・フッドが貴族としていわゆる国政に対抗していくんですか？

坂和：そうですね。その時の王様がジョン王というのがね、これが悪い王様ということで代表されるんですけどね、何を悪いことをしたかという、あの当時イギリスっていうのはフランスから攻められて非常にやばい状態にあったんですね。そこでフランスをやっつけるんだけど、自分に従わない貴族連合の連中に対してね、重い税金をかけると。それに従わないやつは、皆殺せと。こういう圧政をひいたわけですね。それに対して、マグナカルタっていうのは、いかに王様であっても税金なんぼでもかける事、そんなことはできないぞとそういうことを約束させたわけですね。

林：そういう大憲章なんですね。

坂和：そうなんです。

林：それは、でも良いことですね。

坂和：そうです。

林：よくそういうことができましたね。

坂和：それをね、実はロビン・フッドの親父さんがね、そういう権利の憲章の草案を書いとったんだと、そのために親父が首切られたんですね。で、ロビン・フッドは子供の時の恐ろしい体験があって、記憶

喪失になっていると。それが、十字軍としてのフランス遠征からイギリスに戻り、そのいろんな王様との戦いを展開していく中で思い出していくと。こういうストーリーなんですよ。

林：ロビン・フッドというのは、もともとの生まれは、じゃあ良いとこの坊っちゃんだったんですか？

坂和：前のケビン・コスナーのロビン・フッドでは、貴族みたいなもんとして描かれてましたが、今回は出生不明ですね。

林：記憶があまりないということで。

坂和：まあ別に貴族というわけではなくて、今回はそのノッティンガムというところにね、十字軍の遠征から戻ってノッティンガムというところに戻るわけですけども、そこらへんがその実は王様の冠を届ける騎士からね、「わしはこれから死ぬので、わしの剣を届けてくれ」とそういう遺言を受けて、彼がノッティンガムに戻っていくと、そういう前半のストーリーが結構あるんですけどね。それと、ロビン・フッドと言えば、その相手の女性として登場するのが、マリアン姫というんですけどね。ケイト・ブランシェットが扮するマリアンというのは、もともと人妻だったんですけども、その旦那が死亡したのでロビン・フッドがちゃっかり彼女と結婚すると。まあそういう面白いストーリーもあるんですよ。

林：ちょっとほわっとさせてくれるところもあるんですね。

坂和：そうですね。今、NHK大河ドラマで『龍馬伝』やってますよね。坂本龍馬は、彼もロビン・フッドと同じように人たらし、女たらしの天才だったようですけどね。千葉道場で「お佐那さんと結婚してくれ」とだいぶ迫られたわけですね、ところが彼は嫌だ嫌だと逃げて結局お龍さんと結婚してるわけですけど。ロビン・フッドは意外と単純にね、マリアンのご主人が亡くなったんで、お父さんから「マリアンと結婚してくれや」と言われたら意外とすんなり「はい、わかりました」と受けるんですよ。そこらあたりは、ちゃっかり者やなあって気がしますけど。

林：一緒になって笑っちゃっていいのかわかりませんが、ロビン・フッドものすごい難しい話だったなって、なんかオチのへんがちゃっかり者やったなって。今度は、ロビン・フッドの一番の見所をお願いいたします。

坂和：見所は、ラストの海岸線での激戦ですね。イギリスって島国ですよ。だから、フランスが攻め込むためには、船団を仕立てて船から陸に上陸しなきゃならんということですから、海岸線での大戦争になるわけですよ。これはだから、大きく言えば、第二次世界大戦の時のノルマンディ上陸作戦というのが、『史上最大の作戦』で描かれてますよね。まあそれより規模は小さいけども、その13世紀におけるそのフランスがイギリス侵略するための史上最大の作戦なんですよ。

林：そこが見所？見応えがありますね。

坂和：そうですね。そこでは、本当にアメリカの海兵隊のような部隊が小船に乗って上陸していくところとかね、それからロビン・フッド達が騎兵隊として駆け抜けていく姿とかね、そりゃもう本当に大スペクタクルですから、是非そこは楽しんでもらいたいですね。

林：わかりました。ロビン・フッド、はい。そして、三国志のDVDがちょっと、クリアファイルもプレゼントしたいんですけども、こちらもお得意のところですね。

坂和：そうですね。あの、これはね、以前にも全20巻っていう三国志のDVDがあったんですけども、今回はなんと95話。で、1話あたり45分ということで、それが順次作られていくと、今現在1～18話までですかね？

林：そうですね。

坂和：そこらがもう発売されてるっていう状況みたいですね。私は1話～6話まで観たんですけども、完全

に睡眠不足になりましたね。

林 : いかがでしたか？

坂和 : だから、睡眠不足を嫌がる人にはこれはよう勧めませんね。睡眠不足を覚悟で観なさいよと。

林 : 私もこれを観たんですけども、やめられないですね。睡眠不足というか本当に次を観たくなるような。

坂和 : そうそう。

林 : で、今までの三国志、私が思っている三国志よりもこれは深いですね。長いだけあって、それこそ先生お得意の時代背景が。まず1話はどこを？

坂和 : えっとね、三国志っていうのは、だいたい200年間を描いているんですけども、その要するに秦の国が滅びましたと、その後、項羽と劉邦の戦いというのがあって、漢の国が出来たんですね。今はだから、中国はみんな漢民族ですよ。その漢っていうのが、紀元前の200年くらいに出来ているわけですね、それが一旦、王莽というやつに潰されて、もう1回復活したと。前漢と後漢という時代が、400年くらい続くんですね。その漢の終わりの後漢の時代、いよいよ国が乱れてきたと。そこで黄巾の乱というね、乱が起こって、天下が乱れると。そこで、漢を復興させるんだと、国を統一するんだということで英雄豪傑が山のごとく現れたと。それが、西暦の2世紀の時代なんですね。第1話は、189年からスタートするんですけども、その中で、まずおどり出た英雄が曹操。当然、この最初の時代では下っ端の役人ですから、天下はもっと上のボス達が牛耳っていると。それに対して若手の武将がどのように手練手管を使ってやっていくかというね、そういうところに流れていくんですけどね。

林 : この三国志、あのもちろん全部今までも本も読まれたらうし、DVDもご覧になったと思います。三国志の魅力とは、一番は何ですか？

坂和 : なんと言っても、一番の魅力は、きら星の如く登場する英雄豪傑から人間を学ぶことができると。人間を学ぶことによって、権力闘争とはどんなものかということやね、やっぱりそのきれい事ではなくて、本物の権力闘争、やっぱりそこでは「邪魔者は殺せ」の世界ですから、そういう生々しい現実のドラマを学ぶことができるという風に思っていますね。

林 : あの、たくさんの登場人物が出てきます。有名なところでは、もちろん劉備とか曹操ですけども。あの、こっそり大好きだわっていうキャラクターありますか？

坂和 : 私はやっぱりね、曹操という大人物をもっと高く評価してもらいたいと思うんですよ。

林 : 嫌われてますよね。

坂和 : 嫌われてますからね。特にやっぱり日本では、「赤壁の戦い」というのが一番有名だし、去年も『レッドクリフ』で世界的に大ヒットしましたからね。そこで、日本人は特に劉備玄徳の義兄弟3人というのが日本的な感覚にあうもんだから、それがみんな好きなんですよ。特に関羽が一番好きなんですよ、日本はね。

林 : 一番好きですね。

坂和 : だから、私はこの三国志の評論でもね、日本の政治家や高級官僚必見！っていう小見出しで書いてあるんですけどね。

林 : 高級官僚？

坂和 : それから日本の政治家ですよ。

林 : 政治家はこれを観ると。

坂和 : そうです。いやまさに今の菅直人総理大臣にこそまず第一に今観てもらいたいですね。たまたま外交問題が今いっぱいあるわけですね。リーダーシップが問われていると。リーダーシップとは何ぞやと、曹操から学べと。

林 : この三国志を観て。

坂和 : そうです。

林 : わかりました。ありがとうございました。今日は駆け足になりましたけど、『ラスト・ソルジャー』に『ロビン・フッド』『三国志』までまで、どうもありがとうございました。

坂和 : いえ、いえ。こういうのしゃべっていると非常に楽しいですから。

林 : もうずっと乗っ取られそうになってまいりました。この番組最後までそんな感じがするので、このあたりで。坂和章平さんでした。どうもありがとうございました。

坂和 : どうもありがとうございました。はい、どうも失礼しました。